

## 映画時評

### コーラ、拳銃、フライドポテト Bowling for Columbine

盛田 常夫

大量破壊兵器の脅威の緊急性が、米英の対イラク戦争開始の理由だった。最初からその口実を額面通りに信じる人は少なかったが、案の定、その額面が割れてきた。「イラクは45分以内に化学兵器を行使できる」という表現をめぐって、ブレア首相は矢面に立たされている。開戦の緊急性を印象づけるために、粉飾された表現が意識的に盛り込まれたのではないか。その情報源とされたケリー博士の自殺によって、ブレア政権は窮地に追い込まれている。他方、アメリカでは、大統領演説で強調された「イラクのウラン購入疑惑」についても、CIAが確証はないと伝えたものを1月の大統領演説に挿入したことにたいして、ライス大統領補佐官が陳謝した。この陳謝で「開戦疑惑」を収束させたいようだ。しかし、謝るだけで済むことなのだろうか。

開戦の緊急性を裏付ける証拠が崩れた。正当防衛を強調して開戦したのに、「緊急性を示す情報は間違いだった」というのである。それなら、正当防衛は成り立たないではないか。「やってしまったことは仕方がない」。「悪者を退治したのだから、結果オーライで良いではないか」。要するに、イラク攻撃の本当の理由は別のところにあるということだ。ウフォルフォヴィッツがいみじくも吐露したように、イラクと北朝鮮との違いは、「イラクがオイルの海に浮かんでいる国だからだ」。

#### Bowling for Columbine

今、ブダペストで、アカデミー賞のドキュメンタリー部門賞を獲得した作品が上映されている。オスカー像の授賞式でブッシュ大統領を痛烈に批判したマイケル・ムーア監督の作品。銃社会アメリカの異常性に焦点を当てたドキュメンタリー・フィルムだ。

アメリカ・コロラド州リトルトン、田舎町コロンバインの高校で、2名の生徒が銃を乱射し、多数の死傷者を出した(1999年)。犯人は自殺するが、この2人は事件の朝、ボーリング場で遊んでいた。事件の後、テレビや映画の暴力的な映像やゲーム、オカルト的なロック(Marilyn Mason)の影響が指摘された。「それじゃ、学校のボーリング・クラブに入っていたこの二人が銃乱射の前にボーリングしたことも、事件の発端になるのかい。ボーリングをしなければ、事件が起こらなかったとでも言うのかい」。違うところに原因があるだろう、というのがムーアの主張である。奇妙な題名は、ここからきている。

ハンガリー語訳が「コーラ、拳銃、フライドポテト」(Kóla, puska, sültkrumpli)になっているもの面白い。フライドポテトより、ハンバーグの方が良かったかもしれない。手軽に買えるものの代名詞であり、アメリカ社会でこれらを本質的に区別するものは何もない。コーラもフライドポテトも、肥満の原因と騒がれ出し、学校から自動販売機を撤去する動きがある。銃もまた、日用雑貨のように手軽に入手できるが、アメリカ社会に深刻な代償

を払わせている。どれも人間と社会にとって「毒」になるものばかりだが、それを禁止することはできない。コーラやハンバーグの食生活を変えることが難しいように、銃を手放すことも難しい。

メイソンへのインタビューでは、ロック歌手の意外な素顔に接することができる。「僕に責任を押しつけるのは簡単なことだ。だけど、僕がやっているのはあくまでロック。大統領が国外でやっている戦争暴力とは比べものにならないだろう」という。コロンバイン高校の悲劇は、コソボ爆撃開始の数時間後に起こったし、リットルトンにはミサイルを製造するロッキード工場があり、従業員の子弟の多くがコロンバイン高校に通っている。

### 異常な犠牲者数

それにしても、銃による犠牲者数は異常である。年間の銃撃による死者は、ドイツ 381 名、フランス 255 名、カナダ 165 名、英国 68 名、オーストラリア 65 名、日本 39 名にたいして、アメリカ合衆国が 11,127 名である。表面的には繁栄と自由の国だが、貧富の格差はきわめて大きい。アメリカ合衆国の 3,300 万人は窮乏状態（貧困線以下）にあり、4,100 万人は健康保険に未加入である。他方、2003 年の国防予算要求額は 3,960 億ドル。

「いったい僕らは、狂気の銃社会に生きているのか、それともただ僕らが狂っているだけなのか」。ここからムーア監督のインタビュー行脚が始まる。

北ミシガンに支店をもつ North County Bank は銃の取り扱い資格を持っていて、新規の預金者には銃をプレゼントする。コロンバイン高校で乱射された弾薬は、町の K マートで購入されたものだった。ムーア監督は事件で負傷し 2 名の生徒と一緒に、店舗にある弾薬を買い占め、K マート本社に持参し、買取りと販売停止を要求する。2 日がかりのデモンストレーションで、販売停止の約束を取り付ける。

デトロイトの河向こうはカナダ。河一本しか隔てていないのに、町の様子は大違いだ。まず、どの家も玄関のドアに鍵をかけていない。アメリカだったら、勝手にドアを開ければ射殺される。ところが、トロントのような都市でも、鍵をかけていない家が多い。ドアを開けると、主人が出てくる。「泥棒はいないのか」と聞くと、「いや、コソ泥被害にあったことがある」という。「じゃ、何故、鍵をかけないの。」「別に、そこまでしなくても」という。カナダの銃の保有率も高い。それなのに、どうしてアメリカに殺人が多いのか。「隣人を信頼していないからだろう」、「天国と地獄が共存しているからだろう」という意見が出る。アメリカから遊びに来た黒人青年も、カナダでは人種差別を意識しないという。

アメリカでは自分と家族を守るために銃が必要だという。それがアメリカの伝統であり、社会の仕組みだ。そうやってアメリカは作られてきたし、今もそうやって社会が機能している。家族と財産は自分で守る、銃はそのための不可欠の手段だという。

そこで、アメリカの歴史が早送りのアニメで展開される。アメリカ大陸の征服は、原住民インディアンの抹殺から始まった。さらに、黒人奴隷を入れることで安価な労働力を確保したが、社会は階級と人種の差別を抱える不安定な構造に立脚することになった。どう

みても、アメリカは開拓移民がインディアン征服と黒人奴隷で作った人工国家だ。

アメリカ政府もまた、戦後、軍事超大国として、各種の戦争を仕掛け、何百万人もの戦地住民の犠牲者をだした。アメリカは生き馬の目を抜く才覚のある者が億万長者になれるパラダイスだが、その裏では膨大な貧困層が底辺にいる。6歳の児童がクラスメイトを射殺した。黒人の母子家庭。母親は往復三時間の通勤時間をかけて、時給 5.5 ドルで働いていた。家賃を払えないから、子供を親戚に預けていた。その家で見つけた銃を学校に持ち出し、クラスメイトの少女を撃った。ミシガン州フリントの悲劇である。

アメリカの富者と貧者は天と地の違いだ。天国と地獄が並存している社会には、銃は不可欠だということか。アメリカはこの論理をそのまま世界中に適用しているだけなのか。

### 落ちた偶像

コロンバイン高校の乱射事件からほどなく、州都デンバーで全米ライフル協会の年次総会が開催された。この総会で銃擁護の熱弁を振るった会長は、往年のスター俳優チャールトン・ヘストンである。デンバー市長はヘストンに総会の中止を求める手紙を出していた。ヘストンは「デンバーに来て欲しくないって？アメリカは移動の自由が保障されている国だ。だって、もう我々はここにいるじゃないか」と挑発して喝采を浴びた。

この場面で、会長がヘストンだと気づかなかった。歳とはいえ、少年時代に観た「ベンハー」のヘストンとは、似ても似つかぬ醜い様相だったからだ。それはたんに歳の所為だけではないだろう。

ムーア監督はハリウッドの邸宅にヘストンを訪ねる（ヘストンは勘違いして、ムーアを迎えたようだ）。「アメリカで銃の犠牲者が多い理由はどう考えるか。」「それはアメリカの歴史が、暴力の歴史だからだ。」「ドイツ、イギリスや日本よりも暴力的だということか。」「そう思う。」「フリントの悲劇のことは知っているか。その事件から何日も経たないのに、ライフル協会のラリーを開くのは無神経ではないか。フリントの町の人に謝る気はないか。」「フリント住民に謝る？。」「コロンバインの乱射事件から何日も経っていないのに、デンバーで年次総会を開いたのも、あまりに無神経ではないか」と問いつめる。この質問に答えることなく立ち上がり、ヘストンは邸宅の奥に引き下がっていく。カメラは背後からヘストンの後ろ姿を映し出す。「ベンハー」の凛々しい勇姿からほど遠いヘストンに、人は何を感じただろうか。コロンバインの町でまた、あのポーリング場で銃の殺人事件が起きた。

ブッシュ政権の対外政策は、銃で身を守るアメリカ人の信念を世界に広めるようなものだ。恐怖を煽ることで、世界の人々に銃による自己防衛を促している。そのような恐怖政策が世界を平和にする途だろうか。そんなことを考えさせるドキュメンタリーだ。

(2003年7月)